



独立行政法人 国立病院機構

四国こどもとおとなの 医療センター

アートプロジェクト Topics

ー今月のショットー

真剣な表情で和紙を葉っぱのかたちに切りぬく患者さん(旧善通寺病院)

はじめは慎重だった患者さん達も、次第にコツをつかみ、虫食いやギザギザなどオリジナルの葉っぱに挑戦していました。某医師は葉脈まで精密に表現して、開院後「私の葉っぱ見つけたよ」と、報告してくれました。



2014年 1月号

ー院内の小さな声からー

その日、搬入口である地下の駐車場は満車でした。なんとか1台駐車できそうなスペースには進入禁止のポールが立っていました。困ったな。と、助手席の荷物に目をやった瞬間、窓の外にポールを持ち上げるAさんの笑顔がありました。Aさんは旧香川小児病で長く清掃の仕事をしていました。毎朝誰よりも早く出勤し、ゴミを片付けてくれたAさん。腕を高くあげて「おはよう！」という定番の挨拶に励まされた日々を思い出します。

でも、Aさんは今、当院の7階に入院しているはず。「あれ？Aさん、もうよくなったの？」と声をかけると、「いやー寝てばかりでは体がなまってしまうんや。こうして何でも手伝っとる方が落ち着く。な。今、役にたったやろ。」笑って以前のように腕を高くあげました。少し細くなったその腕に私は心から「ありがとう。」と言いました。



こもれびのオブジェ

成人エントランスには3本の「光る樹」があります。太い幹の上にまあるく茂っている葉っぱ。その隙間からこぼれる光は、患者さん達をおひさまと同じ色でお迎えし、待ち合い空間をやわらかに包みます。

その「樹」の葉っぱは、患者さん、医療スタッフ、隣接する看護学校、養護学校の学生さんなど、旧善通寺病院に関係する多くの人の協力によって、新病院（四国こどもとおとなの医療センター）のために制作されました。様々な風合いの和紙を、一枚一枚木の葉の形にちぎりながら、来院する患者さんの不安な気持ちが少しでも和らぎますようにと願いを込めました。そうして出来上がった葉っぱを、FRP（ガラス繊維強化プラスチック）の型枠の中に漉き込みました。バラバラだった葉っぱが、型枠の中で重なったり重なったり、影響し合いながら次第に全体としてのまとまりと深みを増してゆく様子は、とても美しく、引き受けたり許されたりしながら成長してゆく「家族」のようだなと感じました。そして、当院の医療チームもこのようでありたいと思いました。

新病院建設に際して、アートで旧善通寺病院の歴史や伝統を受け継ぐものを。と考えた時、人の手のぬくもりを想いました。遠い過去からこの場所で、「手あて」をし続けてきた人々のぬくもりが、いつまでも変わらず来院する方々に届きますように。葉っぱ一枚一枚に込めた祈りは、日々進歩し続ける医療技術と手を取り合いながら、その先の未来を優しく照らしてくれると信じています。

今月の一枚

作家: 今井 理恵

親鳥を待つひなたちが、風に乗って飛んできた花びらとたわむれる姿を描きました。「待つものはまだ現れないけれど、あたたかい巣の中で仲間(兄弟)たちといっしょだからさみしくないよ」「離れていても心だけは風に乗せて飛んでゆけるから大丈夫。」そんなメッセージが伝われば良いなと思っています。